神薙家一族列伝　京に忍び寄る鬼の影

神薙家当主

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

朱点童子打倒から百年近くが経った頃、京から遠く離れた神薙ノ国で静かに物語は始まる。

※原作ぶっこわしなストーリーです。

基本的にはゲームと同じく当主の一人称で描いていきます。

当主交代と同時に一人称のキャラも変わっていきます。

また、各キャラや職業の設定は途中で変更するかもです。

一応柊編の終わりまでは構想考えてありますが次の当主からはまだ考えてなく、キャラ設定や職業の設定に修正を入れるかもしれません。

一応、次の当主への代替わりで修正が必要なら修正をしてそれで設定は確定させようと思います。
時系列としては俺屍2と時間軸は同じですがパラレルワールドの様な物です。
また、幾つか原作と違う部分もあります。
＊原作と違う部分
・交神出来る神様や奉納点
・鬼神になった神様の種類や解放条件
・原作に無い新職業
・職業の性能
・神様同士の関係性や神薙家と神様の関係性
・神様のキャラ
・武器の性能（名前が原作と同じで効果が違う物あり。）
・ラスボス
・舞台となる場所
・攻略するダンジョン
それ以外は俺屍2をベースとして作成しています。
一部俺屍1をベースにしたりしています。

＊前書き、後書きにて各種設定の話をしていきます。
よろしければご覧ください。
見なくても物語はわかるように書くつもりです。

目次

初代当主　柊編

神薙家始まり　1
子供　8
初陣　14
鬼人、柊　22
投資　34

初代当主　柊編

神薙家始まり

１１２０年　１月　神薙ノ国（現群馬県）

「おはようございます。当主様。
体のお加減はいかがですか？」
銀髪の少女がそう微笑む。
その目線の先には桜髪の少女がいた。
赤と黒の着物に桜色の帯、着物には白で桜の花の模様。
「あなたは？」
桜髪の少女が呟く。
「私は狼那（ろうな）。神薙家へ遣わされた世話役に御座います。」
銀髪の少女が答えた。
「神薙家？」
「はい。あなた様はその初代当主にあらせられます。
天界第一位の女神、大照天昼子（たいしょうてんひるこ）様より当主様のサポートをするようにと遣わされまし

た。」
狼那はそう微笑んで答える。
「良く、わからないわ。」
「お名前は覚えておいでですか？」
「ええ、それくらいは。
私は柊(ひいらぎ)よ。
でも、それ以外の記憶は・・・
思い出せないわね。」
柊が悲しそうに言った。
「それも致し方ないでしょう。
貴女は鬼に喰われて死んだ所を黄川人(きつと)様に助けられ、反魂の儀によって蘇ったのです。
しかし、蘇る際に邪魔が入りました。
とある鬼が貴女に2つの呪いを掛けたのです。
1つは短命の呪い。
貴女は産まれて2ヶ月で戦場に出れるまでに成長しますが、その分寿命も2年程。
成長が速い分寿命が尽きるのも速いのです。

そしてもう1つが種絶の呪い。
貴女は人間との間に子を為すことが出来ません。
ですがご安心を。
昼子様よりあなた様方一族に交神の儀を執り行える様に取り計らって頂きました。
交神の儀とは神との間に子を為すことが出来るのです。
しかし、その子もまた呪いの効果を受けております。
この呪いを解くには鬼を倒すしかありません。
そして、鬼を倒すのは貴女方神薙家一族にしか出来ぬ事なのです。」
狼那はそこまでしゃべると静かに茶をすすった。
「ご安心下さい。
当主様の為に遣わされたのがこの私。
鬼を倒し、呪いを晴らすまで確りとサポート致します。」
「鬼を倒すと言っても私にその技術は無いわ。」
「それもご安心を。
ここに指南書が御座います。
この指南書を読むとあら不思議。
瞬く間にその職業を使いこなせる様になるのです。

ただ、私の元にある指南書は薙刀士の指南書1つのみ。
他は鬼に奪われてしまいました。
ですが、心配は不要です。
鬼を倒せば手に入りますから。」
狼那はそう言って青い冊子を置いた。
表紙には『薙刀の指南書』と書かれていた。
「武器や防具も一式揃えてあります。
ただ、お一人で向かうのは何分危険を伴いますから。
今月は交神をして一族を増やしましょう。
今回は特別にとある男神様がいらしてくれておりますから。」
狼那の言ったタイミングで1人の青年が部屋に入ってくる。
赤髪の青年はにこやかに微笑む。
「やぁ、気分はどうかな?
って聞くまでも無いか。
いきなりワケわかんないよね。
ま、そればっかりは仕方無いさ。
昼子姉さんの事だからロクな説明もしてないんだろう?

どーせ倒す鬼の名前も聞かされていないんじゃないかい？」
赤髪の青年はケラケラと笑いながら言った。
「まぁ、心配しなくてもそこら辺は狼那が教えてくれるさ。
優秀な側付だからね。
死んでも3日で蘇生するし交神の儀を執り行える。
それでいて歳もとらない。
正に君にぴったりの側付ってワケさ。」
クククと笑った青年は狼那を見る。
「挨拶も済ませた事だし早いとこヤっちまおうぜ。」
「黄川人様、まだ名乗られてもおりませんよ。」
「おっとごめんごめん。
俺は黄川人。天界第二位の神様さ。
こーみえて偉いんだぜ？
鬼の復活で天界はてんやわんや。
鬼に力を奪われる神、昼子姉さんの邪魔をするべく地上に降りる神、君達に稽古をつけると地上に降りる神。
まったく神様ってのは自由気ままでしょうがないね。

そう言うわけで今天界は大変なんだ。
鬼なんて倒してる余裕が無い程にね。
そこで君達の出番さ。
神と交わり子を為して一族を繁栄させながら鬼を討つ。
ただ、普通の人間が鬼に叶うはずがない。
だから、神との子を為すんだ。
神との間に産まれる子は神に匹敵する力を持つのさ。
だったら神の代わりに鬼を討てるだろう？
早い話が君達は神様の代理・・・いや、駒だね。
２年と言う短い一生を鬼を討つ為に散らす。
それもこんな辺境の地で。
なんとも泣かせる話だよ。」
「黄川人様、お話が・・・」
黄川人はそう言ってクククと笑いながら語る。
狼那が横から止めなければ更に長く続いただろう。
「あぁ、そうだね。
じゃ、狼那頼むよ。」

「はい。かしこまりました。
これより、交神の儀を執り行います。」
狼那がそう言って神楽を踊る。
これが交神の儀なのだろうか。
私の訳もわからないまま狼那の踊りが終わる。
「来月にまた会おう。
次来るときはお土産でも持ってくるからさ。」
黄川人がそう言って部屋を出ていった。
こうして私は神薙家初代当主として訳がわからぬまま始まったのだった。

子供

１１２０年　２月

交神の儀をした月は1ヶ月ゆっくり休む。

そう言うものらしい。

私と狼那は1ヶ月のんびりと過ごした。

鬼退治なんて話を聞いたがそんな話無いようにも感じる程平和な1ヶ月だ。

そして、交神の儀からちょうど一ヶ月。

黄川人が内に来た。

彼の後ろには私と同じ桜髪で顔の良く似た3人の女の子がいた。

彼女達は既に私と同じくらいの背丈があって同い年かそこらにしか見えなかった。

「やぁ、元気にしてた？

先月の交神で授かった子を連れてきたよ。

ククク。元服前に無理矢理交神したのに三つ子だなんてさすがはご当主様。

はら、この子達が君の娘だよ。

名前と職業を決めてあげな。

あぁ、薙刀しかないんだっけ。
しょうがないなぁ。
ほら、途中で拾ってきた大筒と槍の指南書だよ。
これがあればちょっとはマシだろ？
さ、さっさと決めて初陣と行こうぜ。」
黄川人がそう言って狼那に2冊の青い本を投げた。
それと同時に3人の女の子を私と前へと押す。
この子達が私の娘？
なんか、実感湧かないな。
ポニーテールの子にロングストレートの子、2つ結びの子の3人だ。
「それじゃあ、葵、楓、椿でどうかな。
職業はそれぞれ薙刀、大筒、槍で。」
私が言った。
ポニーテールの子が葵、ロングストレートの子が楓、2つ結びの子が椿となった。
3人はこくんと頷くと私の元によってきた。
「それでは、3人が戦闘に出れるまで2ヶ月ございますから、それまでの間は当主様含めて訓練を致しましょう。」

狼那が言った。
そういえば2ヶ月もすれば戦場に出れるって言ってたっけ。
「それじゃ、よろしく。
俺はまた何かあったら来るよ。
それと、次回からは交神の儀で奉納点を貰うからね。
今回は出血大サービスさ。タダでやってあげる。
まぁ、タダより高い物はないって言うだろ？
もちろん、見返りは求めるさ。
鬼を倒すこと。それが見返りだ。
打倒すべき鬼は全部で4体。
今確認されてる危険な鬼達だ。
熊童子（くまどうじ）、虎熊童子（とらくまどうじ）、星熊童子（ほしくまどうじ）、金熊童子（かねくまどうじ）と呼ばれる4体さ。
正体も判明していない鬼だが4つの迷宮に潜んでいるって話だ。
今のところの最終目標はこの4体の鬼を見つけ出して打倒する事。
まぁ、気掛かりなのは君に呪いを掛けた鬼はこの4体とは別って所。
その鬼って何者なんだろうねぇ。
にしても短命の呪いと種絶の呪いかぁ。

懐かしくて笑っちゃうねぇ。」
黄川人はそう言ってクククと笑うとヒラヒラと手を振りながら帰って行った。
「黄川人様がお話しされた鬼こそが我ら神薙家一族の打倒すべき鬼です。
鬼は迷宮の奥深くに潜んでいるでしょう。
まずはそれを探すところから。
様々な迷宮に潜り、探索すれば見つかるでしょう。
取り敢えず、本日から2ヶ月、訓練をして出撃の準備を整えましょうり
私がお相手致しますから。」
そう言って狼那は立ち上がると庭へ向かう。
私と3人の娘達も後について庭へ向かった。
「私の式神が皆様の相手を致します。
まずは職業の特徴を理解し、前列と後列を分けて下さい。
本来の戦闘では当主様が指示を出されます。
葵様、楓様、椿様は隊長であられる当主様に進言をして下さい。
自分で考えて、3つほど出せれば良いですね。
当主様は進言を受け入れるか自身でご指示なさるか状況を見て自由にお選びくださいませ。

全ては隊長である当主様の手腕にかかっております。
まぁ、迷ったら進言を選んであげれば良いと思いますよ。」
狼那はそう言いながら白い紙に黒い文字と赤い模様が描かれた札を取り出す。
「まだ訓練を始めたばかりですから式神から攻撃はしません。
皆様が攻撃をする練習に御座います。
では、式神召喚！白羊盾（はくようじゅん）！」
狼那がそう言うとふわふわとした真ん丸の綿の塊が現れた。
と思うと上から女の子の顔が出る。
女の子には羊のような角が側面に生えている。
見た目からして羊毛らしい。
羊毛の塊と言うわけか。
「この式神は防御用の式神、白羊盾。あらゆる攻撃から身を守る式神です。
ですので、切っても当主様達の攻撃なら耐えられるますから練習としてぴったりですよ。」
狼那がそう言って微笑む。
私達は自分達の武器で白羊盾を攻撃していく。
前列なら横一列全員を、後列なら1体を攻撃できる。

薙刀の扱い方を学ぶには丁度良い相手だった。
そうして私達は2ヶ月の間、狼那の元で戦闘についての知識を高め初陣に備えた。

初陣

１１２０年　４月

２ヶ月にも及ぶ訓練を終え、私達は初陣を向かえた。

私と葵、椿が前列で楓は後列だ。

「当主様、今回は初陣ですので出陣先も、引き際も私が見極めます。

まずは、本物の鬼との戦闘に慣れてください。

話はそれからです。

体力が減り、それを放置すればその分健康度が減ります。

健康度は皆様の寿命そのもの。

これが低くなればなるほど寿命も短くなると考えて頂いて相違ありません。

ですから、少しでも傷を負ったらすぐに回復。

アイテムなんて鬼を倒せば手に入りますから躊躇わず使って下さい。

それに、街に帰れば買えますし。

良いですか、初陣でなくても鬼との戦闘は常に命大事に、です。

鬼を倒すよりも自らの命を大切になさって下さい。」

狼那はそう良いながらアイテムを携帯袋に詰め込むと私に渡してきた。
「今回は携帯袋の中身も私が決めました。
次回からは当主様にご指示頂きます。
当主様が私にお任せになると言うのであれば私が決めますがご自身で決めたいのであれば決めて頂いて構いません。」
「ありがとう、狼那。」
私が狼那に微笑む。
「それでは、バーンとぉ！参りましょうか。
こほん。
当主様、ご出陣!!」
狼那が言った。
狼那にしては珍しいな。
バーンとぉ！なんて狼那らしく無い。
私達は狼那の後について迷宮へと向かった。

「うぅ、葵姉様怖いです。」
「楓姉さんそんなくっついていたら危ないわ。

私達は前列だし。」
「大丈夫だよ。お母さんと一緒に練習したでしょ？
学んだことを忘れずに、ね。」
三姉妹がそう言ってお互いを励まし合う。
仲も良くチームワークも心配は無さそうだ。
「今回行く迷宮は鶴眼ノ宮（つるめのみや）と呼ばれる迷宮です。
昔この国を治めていた武家の大きな屋敷で今では鬼の住みかになっています。
ここの鬼なら強くもありませんし良い初陣になるでしょう。」
狼那がそう言って指差す先には白い壁に赤い瓦屋根の大きな屋敷が建っていた。
屋敷の門には鶴の像があり、扉は鶴が翼を広げたような形をしている。
鶴好きの武家の家なのだろうか？
「やぁ、ここ鶴眼ノ宮は昔この地を治めていた武家の屋敷だ。
こんな辺境を治める物好きが君たち以外にもいるなんて驚きだろう？
でもその武家は滅びた。
それも帝から打ち首されてな。
それで恨まない訳が無い。
ここには帝を恨み鬼となった武家の当主がいるらしいぜ。

それじゃあ、頑張りなよ。」
黄川人がふらっとやって来てこの迷宮の説明をするとまたふらっと帰って行く。
ええっと、あれは？
「黄川人様はあぁして気が向いた時にその迷宮の話をしてくださるのです。
これからも迷宮攻略の際に会うことはあるでしょうね。」
狼那がそう言って微笑む。
「帝を恨む鬼かぁ。」
「あ、葵姉様。は、離れないで下さいね。」
「帝を恨む鬼ね。
今の私達で倒せるのかしら。」
3人が口々に言った。
少しのんびりや屋だけどやるときはしっかりやる長女の葵。
怖がりで葵にくっつきっぱなしな次女の楓。
しっかりもので冷静な三女の椿。
この2ヶ月で3人の性格や癖もだいたい掴めてきた。
「行きましょうか。」
私が言うと三姉妹が声を揃えて元気に「はい！」と返事をする。

「ここから先は当主様がご先導下さい。鬼と逃げるか戦うか、先へ進むか留まるかの判断もお任せします。

ただ、危険でしたら私の方から撤退の音頭を取らせて頂きますので。」

狼那がそう言って真面目な顔になる。

いつも微笑んでいて優しい狼那とはがらっと気配が変わった。

いわゆる戦闘モードと言うやつなのだろう。

「それじゃ、行くよ。」

私がそう言って屋敷の門の扉を開く。

少し先に屋敷の入り口が見えるがその前には鬼がいた。

「餓鬼3体と旗振り大将ですか。初戦には丁度良い相手かと。」

狼那が言った。

「お母さん、前列を凪払うか、防御、後列に下がって餓鬼1体を斬るか、どうする?」

葵が言った。

進言を3つ程と狼那が言っていたが葵はそれをしっかり守って3つの進言を出してくれた。

「敵は全員前列だから凪払って!私も続くから!」

葵が1番に駆け出して行って餓鬼と旗振り大将を凪払った。

もちろん、それで倒せるほど甘くは無い。
私も続けて凪払う。
「私は後列に下がって餓鬼を突くか防御、前列のまま餓鬼を突くか。お母さんどうしよう。」
「椿は後列に下がって餓鬼をお願い！」
椿も続けて進言をしてくる。
椿が後列から槍で餓鬼1体を突き刺すと餓鬼が黒い煙になって消えた。
やっと餓鬼1体か。
「えと、前列に出て敵全体を攻撃か、後列のまま敵前列を攻撃か防御、お母様どれが良いかな？」
楓が言った。
今回楓には散弾を持たせている。
「楓は後列のまま撃って！」
私は指示を出すと楓が後列から大筒を放つ。
楓の攻撃で餓鬼1体が倒れた。
残るは餓鬼1体と旗振り大将だけだ。
私は狼那の方をチラッと見た。

「私は当主様のご指示とは別に動かせて頂きます。」
そう言って狼那が札を取り出して真上に投げると札が大剣に変わり大剣が降ってきた。
狼那の得物は大剣らしい。
「では、これで餓鬼は終わりですね。」
そう言って狼那が残った餓鬼に止めをさした。
「これでとどめ!」
私が残った旗振り大将を切り払う。
旗振り大将も煙になって消えると狼那の持っていたおみくじの箱の様なからくりから薬が１つとお金が８０両出てきた。
これは?
「これは戦利品スロット。
鬼との戦闘に入るとスロットが回り、鬼を倒すと止まったアイテムやお金を獲得できる道具です。今回は若葉の丸薬１つと４０両２つに止まったのでこうしてアイテムとお金が出てきたのです。」
狼那が言った。
そう言えば訓練の時も鬼を討てば戦利品が手に入るって言っていたな。

これのことなのか。

見事初陣の初戦闘を勝利で飾った私達は更に奥へと進むのだった。

鬼人、柊

鶴眼ノ宮攻略は順調に進み、鬼との戦闘にも慣れてきた。
最初は皆攻撃や防御しか進言する余裕が無かったが今では補助系の術や術の併せも進言してくる様になった。
葵は補助系の術を良く進言してくれるし椿は併せの進言が多い。
楓は少し早めに回復の進言をしてくれるあたり怖がりな楓らしい。
皆それぞれらしい進言をしてくれて私も助かっている。
お陰で初陣の割には奥までこれたと思う。
「当主様、どの迷宮も入口付近の『辺』、丁度中腹あたりの『中』迷宮最深部の『奥』の3つに別れています。
そして、どの迷宮にも辺、中、奥にはそれぞれ鬼となった神、鬼神がおります。
鬼神は元々神であった存在。
故に強いですが倒せば天界へ戻られる神もおります。
そういった神は交神相手になりますから、解放されるのが宜しいかと。
ただ、今回は初陣ですからご無理はなさらず。

携帯袋の中に引際の笛と呼ばれる道具を入れております。
これを吹けばどんな戦闘からでも必ず撤退できます。
何かあったら迷わず吹いてください。」
狼那が言った。
鬼神か。
元々は神様だったと言うのは黄川人が言っていた地上に降りた神々の事だろう。
この迷宮にもそんな神が3人もいるのか。
出会いたくは無いけど出会ったら戦うしか無いんだよね。
「鬼神か、会いたくはない相手だね。」
「黄川人様の話では昼子様を恨む者、神薙家に鬼を倒されると困る者、神薙家へ助力する為に敢えて敵となった者、神によって事情は様々ですが剣を交えずにすみそうな神はまず降りてはいないですね。
迷宮で会ったなら敵と思った方が無難かと。」
狼那が言った。
神を相手にするってのも嫌な話だ。
「うう、怖いよぉ。」
「そんなに奥まで行かなければきっと大丈夫よ。」

怖がる楓を葵が頭を撫でながら落ち着かせる。
「お母さん、火は後どれくらいですか？」
「そうね。火は3つって所かしら。もう少し奥で鬼を倒して帰還って感じかしらね。」
私がそう椿の問いに答える。
「そうですか、そろそろ技力も少なくなってきたので少し心配で。」
椿が言った。
確かに、皆技力は半分をきっている。
出来るだけ技力は温存しておいた方が良いかな。
わざわざ術でなくても倒せる相手だし。
「当主様、お待ちを。」
狼那がそう言って私達の歩みを止めた。
「どうか、したの？」
「ええ、非常にマズイ事態になりました。」
狼那がそう言ってごくりと唾を飲み込んだ。
「人間と言うものは時に恐ろしいものよのう。
自らの命を守る為に他人を簡単に差し出す。
そうはなりたくないものよのう。」

声がした。
男の声だ。
普通の声のはずなのに威圧感がした。
強い。そう私達に感じさせる声だった。
「貴方様はっ!?」
「おぉ、狼那か。
久しいものよのう。
黄川人について行ってから何年経つか。
あの風雲児についていくのも大変であろう。
我も神としてあの者の行く末を見てきた。
黄川人は随分と大変な目にあったものよのう。」
そこにいたのは灰色の髪をした男だった。
「お久し振りにございます。大隅爆円様。」
「その者達が神薙家の一族か。
昼子がまた何か企んでおるのだろう。
我に神薙家の者共に稽古をつけて欲しいと言ってきおったわい。
昼子の企みにのるのは少し癪ではあるが神との間に子をなす一族。

その力量を見てみるのも良かろう。
それに、天界では戦闘などせんから体がなまってしまう。
たまには動かさねばな。
黄川人からもここで待ち構える様に言われておるし黄川人も何か企んでおるのだろう。
人の企みに荷担するのは好きでは無いのだが。
ま、それも面白かろう。」
大隅爆円と狼那が呼んだ神は私達に向けて術を放ってきた。
「させません！白羊盾！」
攻撃は咄嗟に狼那が召喚した式神によって守られた。
「ふむ、腕を上げたか。狼那。
だが、我が見たいのはそなたの実力では無い。
神薙家の実力だ。」
爆円がそう言って今度は距離を詰めて来た。
「お母様、防人です！」
「母さんに速瀬！」
「お母さんに陽炎だよ！」

３人が進言をするより先に私へ術をかける。
爆円の狙いが私だったからだ。
「くっ！」
私も薙刀で応戦する。
相手は素手だがさすがは神。
かなり強い。
「お母様にお雫です！」
楓が咄嗟に回復をしてくれる。
「母さんに武人！」
椿が私に武人をかける。
「てやぁ！」
爆円に向けて薙刀を払う。
爆円は分かっていたかの様に簡単にかわした。
「今です、白浪の併せ、行きます！」
楓がそう言って併せの起点となる。
「併せるわ、楓！」
椿が楓の白浪の併せに併せた。

「私も！白浪！」
　葵も白浪に併せる。
「私も・・・って暇無いか！」
　私が併せようとするもそれよりも早く爆円が私に詰め寄る。
「併せを邪魔しなくて良いんですか？」
「うむ。今はそなたの相手をしておる。
　それに、白浪の併せ程度我には効かん。」
「白浪の併せ！せーのっ！」
「「わっしょい！」」
　私と斬りあって爆円が離れた隙に楓が併せを出す。
　しかし、爆円に直撃した白浪だったが全く効いている様子は無かった。
「その程度の術では我は倒せんぞ！」
「ならば！」
　椿が突っ込んで行く。
「椿！」
　私の声よりも早く椿が爆円に吹き飛ばされる。
　椿の腹部からは血が滲み出し椿が腹を押さえながらゆっくりと立ち上がる。

「まず1人。」
　爆円が言った。
「椿！そうだ、お雫！」
　楓が椿に駆け寄って術をかける。
　しかし、それは悪手だ。
「楓！ダメよ！今椿に近付いたら！」
「2人目だ。」
　葵の叫び声も虚しく楓の背中にかかと落としが決まる。
「嘘・・・」
　葵がその場で膝をつく。
　姉妹2人が目の前でやられて完全に戦意喪失してしまった様だ。
「このままじゃ・・・
　狼那、後をお願い。」
　私は静かにそう言って静かに深呼吸をすると薙刀を地面に突き刺した。
「私の身体に流るる鬼の血よ、今ここに滾れ。
　私の身体を鬼人と化して鬼を討つ力に変えろ！
　鬼人化!!」

私が叫ぶと心臓がどくん、どくんと鼓動が強く、速くなる。
そして、それと共に私の額には角が2本生える。
髪は桜色に爛々と輝き始め、眼も紅蓮に輝く。
歯には鋭い犬歯が生え体が軽くなる。
鬼の血を浴びたせいか私には鬼の血を一時的に強く出して鬼と同等の力を得られる。
もちろん、自らの命を蝕む術故に連発は出来ないし効果時間もあるから長期戦は出来ない。
だが、それでも余りある力だ。
「はぁ、はぁ、鬼人化はこんなにも凄いのね。
力が溢れるわ。
だけど、自我を保つのが大変ね。
少しでも気を抜いたら鬼に墜ちそうだわ。」
私は静かに呟きながら薙刀を手にする。
「大隅爆円！神薙家初代当主の名に掛けて貴方を討つ！
私の家族は殺させないわ！」
私はそう言って爆円に薙刀の刃を向ける。
「ほう、鬼人か。それも面白かろう！」

爆円はまっすぐに私を見据え、私に襲いかかる
鬼人となった今ではそんな爆円の行動が見える。
鬼人になり身体能力と共に反射神経も高まっているのだ。
「ほう、ただほざくだけでは無いか。
そう言うだけの力はある様だな。」
爆円はそう言って少しずつ後ずさる。
だが、私の鬼人化ももう終わりが近い。
やはり、コントロールが上手くいかないから無駄に鬼人の力を使っている様だ。
上手くコントロール出来ればもっと長持ちするだろう。
「はぁぁぁ!!!!」
私は私の出来る限りの速度で薙刀を振り回し爆円へ連続で斬りつける。
その速度は既に鬼の物。
爆円以外は私の斬撃を追えていない様だ。
爆円の顔を見ると額に冷や汗が見える。
体力はまだある。
鬼人化ももう少しならいける。
ここは、押しきらなきゃ。

私は手を止める事無く薙刀を振るう。
防戦一方だが確実に防いできた爆円の身体にも少しずつだが傷が付き始める。
段々と私の攻撃を防ぎきれなくなっている様だ。
「まさか我が傷を負うとはな。」
爆円がやっとの事で私の猛撃から抜ける。
私の鬼人の力も底を尽き始め、髪や瞳の輝きは薄れていった。
「はぁ、はぁ、はぁ、」
「我も力が振るえぬがそなたももう終わりの様だな。」
爆円が膝を地について言った。
私は最後の力を振り絞って薙刀を握り直す。
「家族は私が守るんだ！だから、貴方はここで倒す！
これが私の奥義！双光柊斬（そうこうひいらぎざん）!!」
私がそう叫んで薙刀で爆円を2度、薙ぎ払う。
「なんと言う強さ。
鬼人の力か。
人間に負けるとはな。
だが、それも面白かろう。

その力、その心、忘れるで無いぞ。
鬼の力はそなたの力だ。
しかし、同時にそなたを鬼に変える力でもある。
本当に家族が大切ならその力、御してみよ。
出来ねばそなたが家族を斬るだけだ。
それだけあれば此度の鬼の大将も討ち取れるであろう。」
爆円はそう言うと天へと昇って行った。
「さぁ、狼那帰るわよ。」
私は薙刀を杖代わりによろよろと立つと狼那に言った。
「かしこまりました。当主様。」
狼那がそう言って軽々と楓と椿を担ぎ上げる。
私は葵の肩を借りて屋敷へと帰還するのだった。

投資

１１２０年　５月

鶴眼ノ宮から帰還した私達は傷の手当てをして４月の残りの日はゆっくりと休んだ。

「当主様、おはようございます。

今日から５月になりますが５月からは当主様のご指示で今後の行動を決めていきたいと思います。

そうは言っても難しい話ではありません。

今月何をするのか、そしてそれをする為の準備はどうするのか。

その位の事を決めていくだけに御座います。

分からない事は聞いていただければ私がお手伝いや助言も致しますのでなんなりとお申し付け下さい。」

狼那が言った。

鶴眼ノ宮では割りと戦えていた。

それこそ、爆円さえ来なければ怪我もなく終われただろう。

だが、爆円の強さのお陰か皆の闘志に火が着いた様に感じる。

三姉妹も毎日朝早くから起きて稽古をしていたり、術の巻物を読み漁り新たな術の習得に務めたりと一日たりとも無駄にしないようにと言う意思を感じる。
母として、当主として、嬉しい物だ。
「街の状況はどう？
帰ってくるとき見たけどあまり賑わっていなかったわ。」
「そうですね。街も財政難でして。
当家に余裕があれば投資をするのも良いかと。
投資すればそれだけ恩恵が返ってくるはずです。
ただ、投資をして当家が潰れてはいけませんから、投資はほどほどにですが。」
狼那が言った。
投資か。街に投資すれば街が発展するって事だよね。
確かに今の街は人も少なく、寂れている。
折角1国の当主になったんだ。街も良い街にしたい。
「狼那、お使いを頼まれてくれるかな。
３０００両程武器屋に投資して来て。
大隅爆円と戦って思ったの。
私の実力不足もあるけどきっと武器も弱かったんだって。

武器自身にもヒビはいってたりしてるしね。」
私が言うと狼那が静かにうなずく。
「それでは、武器屋に３０００両の投資でよろしいですね？
投資後の当家の資産は５０００両。先月の出陣での収支は＋２０００両。
帳簿にまとめておきますので詳しくご覧になりたい時はご活用下さい。
それと、毎月のやった事等も帳簿に書き留めておりますので、過去の確認や今後の予定を立てる際にご活用下さい。」
狼那はそう言うと投資をするために出ていった。
狼那が帰ってくるまでの間に今月どうするかを決めようか。
私は娘達を呼んで部屋に集まる。
「今月の予定を決めようと思うの。
まず、今月は討伐に出るつもりよ。
皆の傷も癒えているし健康度も問題はない。
なら、若い内に経験を積みたいから討伐に出たほうが良いわ。
それで、相談の内容は何処に行くかよ。
候補は３つ。
先月も行った鶴眼ノ宮。

そこよりは少し難易度が高いけど敵の殆どが物理主体で戦いやすい『榛名ノ湖城(はるなのこじょう)』。
鶴眼ノ宮と同等の難易度だけど術を使う敵が多い分戦いが長期化しやすい『赤城山(あかぎやま)』
皆は何処が良い？」
私が聞くと3人はそれぞれが考える。
やはり、1度行った経験のある鶴眼ノ宮が行きやすいだろう。
だが、大隅爆円の事もあり行くのに躊躇ってしまう。
榛名ノ湖城と赤城山は少し遠いしどちらも鶴眼ノ宮よりは癖がある。
私も1人で決めようと見てみたのだがやはりどれにしようか決めかねて3人にも聞いてみた次第だ。
「私は榛名ノ湖城が良いと思います。
物理攻撃主体なら鶴眼ノ宮と戦い方は同じでもいけるでしょうから多少は戦闘もしやすいかと。」
椿が言った。
難易度は他2つより高いがそれでも鶴眼ノ宮と同じ様な戦闘が出来るなら戦闘はしやすいだろう。
椿も良く考えて答えを出してくれたんだな。
「私は鶴眼ノ宮が良いと思うな。

先月行った場所だから多少は勝手が分かるし。」
「か、楓も鶴眼ノが良いと思う。
その、怖いけど行ったこと無いとこに行くよりは怖くないから。」
葵と楓が言った。
確かに先月行った場所だからと言う安心感はある。
もちろん、緊張感をもって行かなければ危険なことに変わりはないが。
「そうね。それじゃあ今月は鶴目ノ宮に行きましょうか。
その代わり来月は榛名ノ湖城に行くわよ。」
私が言うと3人が頷いた。
そして、そんな相談をしている内に狼那が帰って来た。
私達は鶴目ノ宮に行くための準備をするのだった。